

『建武年中行事』雑考（四）

叙位議

○「昼御座」の天皇と蔵人

『内裏式』以下、国撰・私撰の儀式書によれば、毎年正月七日には、節会に先立って叙位の式が行われた。年頭にあたって、新たな位を賜るべき官人が庭上に立ち並び、天皇から位記が下されるのである。

また、藤原基経の作成になるという『年中行事御障子文』以下の年中行事書によれば、同じく正月の五日あるいは六日には、叙位議が始められることになっていた。当年の新叙のうち、選叙令に天皇の勅授と規定される五位以上については、御前もしくは摂政の直廬においてこれを定め、位記作成・請印を経て、七日の式に臨んだのである。

即ち、恒例の叙位に関するスケジュールとしては、式の規定に正

佐藤厚子

月七日と定められた位記授与の儀に向けて、五日あるいは六日から叙位議を行うことが、九・十世紀の頃に慣例化し、それが、以後も引き継がれたもののようである。そして、儀式書や日記等に、叙位議の次第が記されるようになるのも、ほぼ十世紀以降のことである。

もともと、叙位議というのは、位記授与の儀に向けて行われる一つの手続きとして、かなり実務的な性格のものではなかったか。少なくとも、本来の性格としては、そういうものだったはずではないかと思う。だが、『西宮記』『北山抄』『江家次第』等、十世紀から十二世紀にかけて著された儀式書を見れば、当時から既に、叙位議は、首尾の通った次第構成のみならず、様式美に対する配慮をも備えて、儀式と称するに相応しいものであったことが分かる。

『西宮記』以下に記された叙位議の、次第構成の大体を、次に示しておこう。

諸卿、左仗に着す——議所に着す。勅盃——蔵人、召しを伝う。
諸卿、弓場に列立。宮文を執り、御前に参上す——叙位を議す

御前における議定の次第は、さらに、叙爵・一加階・入内など、審議内容の種目毎に細分化される。以上のような次第の組み立て方は、『西宮記』『北山抄』『江家次第』ともに、ほぼ共通する。また、議定後に行われる入眼・請印に関しては、いずれも、項目を改めて詳述している。

これらの儀式書が、叙位議を、どのような視点で捉えているのかということは、何よりも、この次第構成に明確に表れている。中心にあるのは御前での議定、そこでの、執筆を始めとする公卿の作法である。議定に参与する公卿の作法が、待機の段階から、順を追って示されているのである。つまり、叙位議という儀式は、公卿らが、天皇の召しに応じて御前に参上し、天皇による叙位決定の場に参与するものである。そういうものとして、提示されている。叙位を行うのは天皇であり、叙位議を主催するのも天皇である。しかし、その記述において、儀式の主体となっているのは、大臣以下の公卿たちなのである。

作者や成立の事情などに照らせば、『西宮記』以下は、主に公卿の世界での通用を想定して著されたものであろう。即ち、こうした公卿主体の記述は、他ならぬ公卿たちの儀式世界から生まれたものと考えられる。同時代以降の大臣公卿層の日記に見える叙位議の記事は、ほぼ例外なく、これらの儀式書の次第構成をなぞるかのように組み立てられているが、それは単に、『西宮記』以下の、朝儀の書としての権威が浸透し、一定の規範的性格を持つに至った結果というだけのことなのだろうか。仮にそうした範型がなかったとしても、叙位議の公卿作法を記し留めるためには、やはり、陣座に着するところから始まり、弓場に威儀を整えて御前に参上し、というように、

先に挙げた儀式書の次第と同じような形に叙述を組み立てて行くことが、最も理に叶っていたのではなからうか。それほどに、儀式書の次第構成は、公卿主体の視点に由来するものであることが、はっきりしている。

『西宮記』等の次第構成と、それがどのような視点に由来するものかということについて、ことさらに拘ったのは、勿論、『建武年中行事』の儀式叙述を理解する上で、多少なりとも手がかりを得ようとしてのことである。

『建武年中行事』の叙位議の記事、特に前半の次第構成は、特徴的である。儀式書との比較のために、まずは、全体の組み立てを見ておこう。但し、後述するように、説明の便宜を考えて、前半の一部については、時間的な前後関係を優先させており、記述の順序は必ずしもこの通りではない。

早旦、藏人頭以下、申文を奏上。申文を選ぶ——御前装束——大臣以下、左仗に候す——藏人、召しを仰す。大臣以下、弓場に列立。笥文を執り、御前に参上す——叙位を議す——下名の作成。入眼・請印

左陣の大臣以下に藏人が召しを伝えるところから後は、基本的に、儀式書の構成と同様である。尤も、『西宮記』等では、諸卿は陣座に着き、次に日華門北腋の議所に移って、そこで天皇の召しを受けるとするのに対して、『建武年中行事』の場合は、左陣から議所に移ることなく、直接清涼殿に向かうとしている。だが、『西宮記』が注記の中で「自陣参上儀」に触れていることから分かるように、議所での勅盃を省略する例は比較的早くから見られ、また、後には、むしろ、この方が一般的となっていたらしい。議所における座次や出

入りの際の作法は、かなり重要視されたもののようであるが、そのことを差し引いても、議所の次第の有無自体を、あまり大きく取り上げる必要はないと思う。『建武年中行事』は、古式に拠らず、近代の通例となった略儀の方を採用した、ということなのである。¹⁾

問題となるのは、やはり、当日早旦からの清涼殿での作業、具体的に、藏人による申文選定・装束奉仕が、次第に組み入れられていることである。このような構成は、何に由来するのだろうか。似た形のものとしては、『江家次第』「叙位」に一項目として立てられた「摂政時叙位事」がある。そこでは、摂政直廬における藏人頭以下の申文選定・装束奉仕に始まり、その後、大臣以下の仗座伺候へと場面を移す構成になっている。

『江家次第』の記事のうちには、例えば「元日宴会」の「内弁細記」などのように、摂関家の家職に関わりの深い作法について、特に項目を儲けて詳述するものがあり、それらは、時に特定の人物のエピソードを交え、家伝に基づいて編まれた口伝や作法書の類を思わせるような文体となっている。「摂政時叙位事」も、そうした項目の一つに分類できるのではないかと思う。

幼帝の時、叙位議は、摂政の召集の下に宮中の直廬にて執行された。議定に先立って行われる申文の選定は、藏人の任務であるが、「摂政時叙位事」によれば、直廬の儀の場合には、摂関家の家司一人が識者として作業に加わるとされる。装束についても、御前の儀であれば藏人が奉仕するけれども、直廬で行われる場合は執柄家家司の沙汰であることが、『夕拝備急至要抄』に見える。本儀たる御前の儀においては、公卿として直接に関与することのない申文選定・装束奉仕の作業が、直廬の儀となれば、摂関家の采配に懸かってくる。

公卿の仗座伺候以前に申文選定・装束奉仕を置くという「摂政時叙位事」の次第構成が、摂関家の便宜に供するという趣旨と全く無関係なところから出たものであるとは、考え難いのである。

ならば、『建武年中行事』の次第構成についても、同様のことが言えるのだろうか。つまり、藏人の申文選定・装束奉仕を組み込んだ儀式次第は、左陣着座を作法の起点とする儀式書等のそれとは違つて、公卿を主体とせぬ、別の視点を表しているのだろうか。

だが、結論を急ぐ前に、本文に沿う形で、もう少し細かな検討を加えておかななくてはならない。実は、『建武年中行事』の叙位議の記事、その前半部分は、次に示す通り、やや込み入った構成になっているのである。

五日、叙位議あり。大臣已下、左仗の座に候。

式日を記し、諸卿の左陣着座から記し起こすのは、儀式書と同様である。そのまま、公卿の視点到合わせて、次第は進むかと思われる。しかし、唐突にも、時は早旦に遡り、場面も清涼殿に移ってしまう。

是よりさきに、けふの早旦に、藏人頭已下、文を奏す。内覧はてゝ後、朝餉にて奏するなり。文御覧じて、えれと仰せらる。頭以下、石灰の壇にて、難なき申文どもを撰とゝのへて、硯のふたに入れて御座の前におく。

藏人は、内覧を了えた申文を、朝餉間の天皇に奏し、その命に従つて、石灰壇の辺りで選定の作業をする。続いて、議定の座の設営に奉仕する。

清涼殿の御簾をたれて、ひの御座の間にはしに半帖をしく。四季の御屏風を、南西北にたてめぐらして、三尺の几丁を御座の

かたはらに立たり。其まへのひさしに、執筆の円座をしく。閑白の座北にあり。南二間するは、西に折れて、上達部の座をしく。

その後ようやく、場面は、大臣以下の居並ぶ陣座に戻る。蔵人が、天皇の召しを伝えるのである。但し、場面が再び陣座に戻るといのは、陣座に候する公卿の視点に立った場合の言い方である。召しを伝える蔵人にとっては、彼の時間軸に沿って、奉仕の場面が移動するとうに過ぎない。そして、本文の記述は、公卿ではなく蔵人の視点に即したものになっている。

蔵人めし仰す。陣の座にむかひて、ひざつきにつきて、これを仰す。未まで見わたす。みなめさるゝよしなり。

*「陣の座に」＝『群書類従』本「陣の座は」。

『新訂建武年中行事註解』に拠り改める。以下同。

次第は、蔵人を主体として進んでいる。蔵人は、早朝から清涼殿に奉仕し、刻限を迎えて左陣に赴き、待機の公卿らを召すのである。

一方、冒頭に左陣着座が記されて後、停止したままであった公卿の時間は、天皇の召しを受けて、ここに初めて動き出す。

大臣、大外記をめして、笏文を仰す。六位外記三人、笏文を持て、日華門より入て、宜陽殿の壇上にすゝみたつ。大臣已下、座をたちて階下をへて〔雨儀御後をふ〕、弓場にすゝむ。

大臣以下は、笏文を捧げ持つ外記を従え、弓場へと向かう。そうして、以後しばらくは、儀式書等に記されると同様の公卿作法が、丹念に綴られて行くことになるのである。

先に、『建武年中行事』の叙位議の次第構成を、以下のように示したが、予め断つた通り、これは必ずしも、記述の順序に忠実なものではない。『建武年中行事』において、叙位議の次第はどのように捉

えられているのか、その流れを示すことを、眼目としたものなのである。

早旦、蔵人頭以下、申文を奏上。申文を選ぶ――御前装束――大臣以下、左仗に候す――蔵人、召しを仰す

『建武年中行事』の叙位議の記事は、『西宮記』等の儀式書と同じく、冒頭に諸卿の左陣着座を置いているけれども、そのこと自体に、実質的な意味はほとんどないものと見てよい。左陣着座の次第が冒頭に置かれているからといって、それが、叙位議という儀式的開始を告げるに相応しい場面として、相応の重みを以て扱われているということでもなさそうである。記述の順序としては、諸卿の左陣着座に始まる次第の流れを一旦中断し、蔵人の申文選定・装束奉仕を割り込ませたような形になっているが、実際には、早朝の清涼殿に場面が転じた時から、左陣を起点とする次第の流れは忘れ去られ、新たな流れが生じている。

清涼殿における申文選定・議定の座の設営から、左陣での召し仰せまでの次第は、蔵人の作法として綴られている。より正確に言えば、天皇の指示の下に、天皇の意を体して奉仕する蔵人の仕事が行なわれている。それは、大臣公卿の関知せぬことである。

『西宮記』以下の儀式書や公卿の日記が、叙位議の次第の冒頭に諸卿の左陣着座を置くのは、大臣公卿にとつての儀式が、その時・その場所から始まるためである。しかし、『建武年中行事』の場合、確かに、諸卿の左陣着座が冒頭に置かれているものの、それが儀式の始まりとなるわけでは、必ずしもない。左陣で召しを待つ大臣以下とは別に、清涼殿では、天皇と蔵人による儀式が、既に早朝から行われているのである。

蔵人による申文選定は、議定に備えて申請書をチェックし種類別に整理するという実務的な仕事であり、いわば、表舞台に対する裏方の準備作業である。しかし、場合によっては、議定に先立つ予備審査としての機能をも持ったわけで、事実上、叙位に直接関与する行為として、その意味は極めて重い。

十二世紀初め頃までの成立とされる藤原重隆『雲図抄』の裏書は、「撰男叙位申文儀」として、清涼殿母屋の「昼御座」で行われる作業の手順を詳しく記しているが、それによれば、早くも、荒短冊を以てする最初の仕分けの段階で、頭の指揮のもとに「有難之申文、並無指事之申文」が密かに抜き取られ、いずれも、正式の選定の対象から外されている。前者は、書式・用字等に問題のあるもの、後者は、特別扱いすべきものを暗に言うのであろう。それらを除外した後、仕分けされた一束ごとに、正式の選定がなされるのである。『建武年中行事』本文に「難なき申文どもを撰とゞのへて」とある、その選定の基準は、一応、旧例に叶うか否かなどという点に、置かれてはいたらしい。だが、裁量の及ぶ範囲を考慮に入れば、果たして実際に、そのレベルに留まったものかどうかは、大いに疑問の余地のあるところである。

申文の選定は、天皇に固有の空間である昼御座において、天皇の意志のもとに、行われた。十二世紀後半の著述と見られる藤原俊憲の『貫首秘抄』「叙位除目事」には、蔵人の心得として、「天下六位以上、有_二所望_一者、其父祖蔭位・才不才・年齒・操行、兼可_レ知_レ之。不然_レバ、有_二其尋_レ之時、臨_レ期不能奏_二子細_一。」とある。申文の奏覧や選定の、その現場において、天皇と蔵人との間で人事関係の情報交換がなされたとは、さすがに考え難い。だが、少なくとも、選

定に奉仕する蔵人は、人事に関する天皇の意向を知悉した上で、その代行者の資格を以て、作業に臨んだはずである。天皇は、蔵人に向けて、自ら「えれ」という詞を発し、選定を命じる。『建武年中行事』は、そう記している。左陣に候する大臣公卿の関知せぬところで、天皇と蔵人による儀式は、既に始まっているのである。

このように考えると、次の装束奉仕の次第も、『建武年中行事』の記述においては、蔵人作法の一環と言う以上の意味を帯びて来るように思われる。蔵人による議定の場の設営。そこに現れるのは、天皇に召されて参上する大臣公卿のための儀式空間ではなく、あくまでも天皇を主体に、天皇の主導のもとに行われる儀式に向けて設けられた舞台装置と読み取るべきであらう。

叙位議の清涼殿装束については、『雲図抄』に詳細な指図があり、また『年中行事絵巻』にも、公卿着座の後の様子が描かれている。それらによって見るに、議定における天皇の座は、広廂、昼御座の間に設けられる。即ち、『建武年中行事』本文に、「ひの御座の間にはしに半帖をしく」とある、その「ひの御座」というのは、清涼殿母屋の一区画としてのそれではなく、東廂中央の、所謂「平敷御座」のことである。この御座が敷かれている間、つまり、石灰壇の北、二間の南に当たる間を、「ひの御座の間」と言う³。議定のための天皇の座は、そこに設けられるのである。

清涼殿には、二種類の昼御座が存在し、それらは、いずれも「昼御座」と称されていた。これが、いつ頃からのことであるのかは、明らかでない。だが、天皇の居住空間であつた清涼殿が、政務の場としての機能をも持つに至ったことと、何らかの形で関連すると考えて、まず間違いはないと思う。母屋には、私的な居住区域として

の昼御座、広廂には、叙位・除目や官奏など、公的な政務の場となる昼御座の間。二つの「昼御座」には、清涼殿に備わる二重の機能が、端的に表れている。

そして、ここに登場する二つの「昼御座」は、清涼殿における儀式の、表と裏、それぞれの暗喩とも言える。蔵人の手で設営された議定の舞台には、彼らの活動すべき舞台裏がある。議定における天皇は、御簾の内に座す。御後には、蔵人が控えている。黒子として奉仕すべき表舞台だけでなく、舞台裏にもまた、蔵人の立ち働く空間があったのだ。勿論、公卿の立場に視点を置く儀式書等に、そうした裏方の活動が明白な形で現れることは、極めて稀である。だが、公的な「昼御座」の背後には、私的な「昼御座」が存在する。そこでは、天皇直属の蔵人が、早朝より休むことなく、裏方の奉仕を勤めていたはずなのである。

天皇と、その意を受けた蔵人は、母屋の昼御座において、天皇の私的領域に属する儀式を行い、その後、公卿を召して、広廂の昼御座の間にて公的な儀式に臨む。それらが公私いずれの領域に属するものであろうと、天皇にとっては、どちらもまさしく儀式の一環である。叙位議とは、公的に天皇親授と規定された五位以上の叙位を、天皇の意によって予め公卿に諮るといふものであり、それだけを取り上げて見れば、元来が天皇の私的な行為に属する性格のものであったはずなのだから。

『建武年中行事』の叙位議の記述は、天皇を主体とするものである。そのように、結論を下してよいだろうか。確かに言えるのは、『建武年中行事』の叙位議と、『西宮記』以下の儀式書や公卿の日記等に記されるそれとは、必ずしも、同一のものではないということ

である。勿論、叙位議という儀式がどのようなものとして扱えられ、どういう形で提示されているかという、表現のレベルを問題としていたのであるが、これまで見て来た通り、蔵人の申文選定・装束奉仕を起点とする『建武年中行事』の儀式次第が、公卿の視点に立つところから生ずるものとは、とても考えられない。しかし、天皇の立場を主眼とするのであれば、このような次第構成が採られることも、決して不自然ではないのである。

ただ、『建武年中行事』の叙位議の記事が、天皇を主体とする記述を以て終始一貫しているかどうかということになると、やはり、話は別であると言わざるを得ない。全体の次第構成に関する限り、これを天皇主体のものとも見ても大きく誤ることはないと思う。しかし、個々の次第については、記述の中心に常に天皇の存在があるというわけでもなく、全てが天皇作法に関わるというものでもないからである。本項で扱った儀式前半の次第はともかくとして、この後の次第、特に議定開始以前の次第を見るに、公卿作法の詳細さを無視することは、極めて難しい。

『建武年中行事』という書は、天皇作法の記述のみを目的として著されたものではなからう。儀式作法の扱われ方については、天皇と公卿層のそれとの間に特段の差別はなく、両者ともに、ほぼ同等の比重を以て遇されている。それは、叙位議に限らず、他の儀式の記事にも共通する本書の特徴である。こうした点を考慮に入れた上で、それでもなお、叙位議の記事に関しては、総じて、天皇主体の傾向が強く感じられると言っておこう。この傾向が、叙位議という儀式の性格に由来するものであるのか、あるいは、『建武年中行事』の叙位議に特有の、例えば、編者の積極的な儀式解釈を含み込んだと

ここに初めて成り立つようなものであるのか。次項において、引き続き考えてみたいと思う。

注

- (1) 議所の次第の省略に関しては、『中右記』長承元年（一一三二）十二月二十五日条、同二年（一一三三）正月五日条に、雨雪の悪天候を理由に、議所の次第を略するか否かを協議した記事がある。中に、秋除目では省略することが多いとの文言も見え、元年の記事は除目の際のことであるが、参考にしてよいと思われる。半世紀ほど後の『玉葉』になると、叙位議に際しては、いずれも左陣で召しを受けているので、議所の次第はなかったものと考えられる。なお、議所出入りの際の公卿作法については『西宮記』『北山抄』の注記等を、座次については、『世俗浅深秘抄』等を参照。
- (2) 『除目申文抄』『撰申文事』には、「匡房抄云」として、除目における申文選定の方法が、具体的に記されている。それによれば、荒短冊を以て一官ごとに一束とし、それぞれについて、旧例に叶うものを三人程選ぶ、などとしている。また、同書「可撰捨之申文事」「撰遺申文事」には、予め選定の対象から外すべき、難書・特別扱いの文についての勘例があり、参考になる。叙位の場合にも、これに通ずるような方法や基準を以て、選別がなされたのであろう。
- (3) 但し、里内裏において、対屋を清涼殿とした場合には、南庇に昼御座を設けるのが慣例であったという。太田静六氏『寝殿造の研究』第七章第一節「平安時代における里内裏の概観」参照。
- (4) 佐藤『建武年中行事』雑考（二）「後・醍醐」とは何かの項においても、同様の指摘をした。

○天皇と関白

召しを受けて左陣を立つた大臣以下の公卿等は、御前に参上するにあたり、弓場にて威儀を正す。無名門の外、軒廊より南に、大臣・納言・参議が、弓場の屋舎を三方から囲むように、向かい合つて並び立つ。

大臣南廊の下にたつ〔南むき〕。納言、弓場のうちに〔柱のと、雨儀はうち〕北上西面にたつ。参議、東上北面なり。はこ文の外記、前の庭にたつ〔北上西面〕。

*「大臣南廊の下にたつ」＝『群書類従』本「南廊の下にたつ」

立ち定まつたところで、大臣以下、位次に従つて昇殿する。

関白はもとより殿上に候て、こくげんに御前の座につく。大臣いうして、すゝむ。大納言以下みな揖す。

この辺りは、『建武年中行事』の叙位議の記事のうちでも、公卿作法のみで成り立つ部分である。中でも、次に掲げる納言以下の昇殿作法は、後の執筆作法とともに、かなり詳細なものとなっている。

大臣着座の後、大納言、管文を取て〔六位外記、ひざまづきて、これをつたふ〕、右青瑣門より〔膝をかけてのぼる〕入て、孫廂にのぼる。御すにそひて、次第にいさゝか中によりて、執筆の円座のまへに硯の筥をおく。先次の間にひざまづく。膝行して進みよりて、硯を地におきて、右の手して、そでさまになをして、硯の下の方を円座にむけてさしよす。げき行して、いさゝか御前の方にむきて、笏をぬきて居ながら、左にめぐりて退く。見参の板をふみならず時、次の人、廊のとに進む。次第に筥をとりて、御前の座につく。一の大納言は管文をとらず。

第一の納言が持参するのは、所謂「硯の筥」であって、『江家次第』によれば、この筥には、「硯・筆台」の他に「外記・史申文、弁・少納言加階申文」が入る。同様に、第二の納言は「五位已上歴名一卷、諸司主典以上補任二卷（上下）、武官主典已上補任一卷、令外官一卷、諸国主典以上補任二卷（上下）、十年労働一卷」を入れた筥を執り、第三の納言は「式部・民部省奏、諸氏爵申文」の他に「諸申文等」を入れた筥を執って、順次、御前に進む。『建武年中行事』のように、硯の筥以下を執る役を、第二の納言よりとする説もあり、『江家次第』は「或曰」として、これを注記している。

納言は、軒廊にて外記から筥文を受け取り、無名門・右青瑣門を経て清涼殿東の孫庇に昇り、執筆の円座の前に筥文を置く。執筆の座は、広廂の天皇の座と御簾を隔てて相對しており、納言は孫庇に昇ると、簀子寄りの位置から徐々に、御簾に緒袖が触れるほどまでに斜行し、御前に至れば膝行して、円座の前に筥文を置く。硯については特に、執筆の用のため、向きを直して置くことを忘れてはならない。御前を膝行のまま退き、次の間で腰に挿した笏を抜いて退路に向き直る。孫庇の南第一間まで戻ると、見参の板を踏み鳴らして次の者に合図を送り、その後、簀子を経て本座に着く。

本文に記された大納言以下昇殿の作法の、およそのところを解いてみた。ここでは『西宮記』『江家次第』を参考にしたのであるが、同様の記事は『参議要抄』『世俗浅深秘抄』等にも見える。儀式書・作法書において、「筥文を執る事」は、叙位議・除目に特有の公卿作法として、特に重視すべきもののひとつとされていたことが知られる。そして、『建武年中行事』においても、こうした公卿作法は、叙位議という儀式を成り立たせるための、不可欠の要素とされているので

ある。

しかしながら、議定の場面に入ると、その記述には、天皇の存在が、極めて大きな位置を占めるようになる。例えば、執筆作法が詳しく記されても、それは常に、天皇作法との関連の中に置かれている、というように。無論、御前にて行われる儀式であれば、その進行が、天皇作法と公卿作法との連携によることは、ある程度まで予想されることである。だが、『建武年中行事』の記述を成り立たせているのは、必ずしも、両者の連携と言えるようなものではないと思うのである。

本文の検討に入る前に、まずは『江家次第』によって、議定の次第の細目を掲げておく。

大臣、執筆の円座に着く——十年労働の奏覧——続紙を召す。申文・勘文等を給う——式部・民部を叙す——院官申文を召す——藏人を叙す——王氏・源氏・藤氏・橘氏を叙す——上官を叙す——諸司労働を叙す——左右近衛将監を叙す——檢非違使を叙す——外衛を叙す——院官申文の奏覧。叙爵——一加階・入内を叙す——他を叙す

『建武年中行事』においても、叙位の内訳やその順序については、おそらく、それほど大きく変わるところのないものが、前提とされているのであろう。そのように推測の形でしか言えないのは、『建武年中行事』の場合、叙位の種目などには、ほとんど関心が向けられていないからである。実際、『江家次第』が連ねる種目のうち、『建武年中行事』の本文に、多少なりとも具体的・個別的な記述の見えるのは、「式部・民部」「院官年爵」ぐらいのもので、「藏人」「氏爵」以下は一括りに省略の体になっている。

儀式書や公卿の日記等においては、議定についても、叙位の種目を挙げながら進行の様子を記して行くことが、ほぼ常道となつてゐる。だが、『建武年中行事』の場合、叙位の種目を以て議定の組み立てを明らかにするということは、特に考えられていないようである。記述の目的は、議定の内容ではなく、要所での儀式作法を確認することにある、ということなのだろう。主たる作法さえ押さえておけば、叙位の種目や順序などに、ことさら拘る必要もなし、ということなのである。

『建武年中行事』が、叙位議の議定を表すのに最も有効であるとした、その作法とは、一体どのようなものか。本文に従つて、具体的に考えてみよう。

参議一人、御前につきて後、御簾を引て、人々着座のやうを御覧じて、大臣をめす。こなたにと仰せらる。大臣称唯して、掛してすゝむ。大臣、笏をたゞしくして候。

叙位議においては、御簾の内にある天皇が、自ら議定の進行役を担う。大臣・納言が全て着座し、続いて参議一人が座に着いた辺りで、全員の揃うのを待たず、天皇は、議定の開始を告げる。「此方に」と、大臣を執筆の円座に召すのである。

とくと仰せらるゝ時、笏を置、右の手して、二の筥をとりあげて、硯をそのあとに引きよせて、硯のあとに筥を置いて、文書を次の筥にうつして、十年労ばかりをのこして、笏をさして、筥を持て、膝行してすゝみて、御簾のもとにてとりめぐらして、下の方を御座にむけて、御簾の内にさし入。大臣、いさゝかしぞきて、笏をぬきて候。十年労を御覧じて返し給。筥ながら御簾を押しはる。大臣、笏をさしてすゝみて、御簾をいさゝかも

たげて、筥を返したまはる。座にかへりて、硯をもとのまゝにとりかふ。大臣、笏を正して候。

最初に、十年労帳を奏覧する。十年労帳については、『江次第鈔』に「六位諸司、積年勞而可叙爵者、外記勘奏也」とある。在職年数により叙爵の対象となる者について、勘文が外記方から提出されてゐるのである。天皇が「早く」と促すと、執筆は、二の筥の文書を次の筥に移し十年労帳のみを残した上で、これと硯との位置を交換し、つまりは十年労帳を正面に据え直し、御簾の下に進んで筥の向きを正してから、簾中に差し入れる。天皇は、労帳を覧じ了えたと、それを入れた筥で以て御簾を押す。この合図を承けて、執筆は労帳を御簾の外に引き取り、円座に退いて、元の如く硯を正面の位置に直す。

又とくと仰あり。大臣、墨をすり、筆を染む。硯の筥にある紙を二巻ながら、一づゝとりあげて、よきを取て、まきかへしておく。加階は、いくつばかりと尋申。何人ばかりと仰せらるゝ時、その程をはからひて、先従五位下とかく。三人ばかりの程をおきて、式部・民部を叙す。此間けんばいあり。

続いて、式部省奏・民部省奏による叙爵の場面となる。天皇が「早く」と促すと、執筆は、叙位簿作成の体勢に入る。墨を摺り、筆を染め、二巻用意された続紙のうちから良い方を選び取り、端の方を残して奥の方を外巻きにしておく。完成した叙位簿は、勿論、上位から下位へ、位次に従つて、叙人の名が連なるのであるが、叙位の決定は逆に従五位下の叙爵から行い、加階は叙爵が全て終わった後に行われる。つまり、記入する順序としては、下位から上位へ、ということになる。それで、加階の分を端に残して、途中から記入す

べく、続紙の奥の方を「まきかへして」おくのである。そうしておいて、改めて加階の予定人数を尋ね、端の方にその人数分だけの紙幅があることを確認してから、「従五位下」とタイトルを書き、新叙の者の名を記入して行く。タイトルの後に「三人ばかりの程」の余白を空けて式部・民部を記入するとあるのは、後に議する蔵人の五位を、式部・民部より上に置くための用意である。

ここで気になるのは、加階の人数を執筆に指示するのは誰か、ということである。『中右記』『玉葉』等によれば、執筆が加階の人数について問答を交わす相手は、関白であることが普通だった。それが、『建武年中行事』では、天皇とされているのである。本文に即して見れば、執筆が「加階は、いくつばかり」と問いかけ、これに対して、「何人ばかり」と人数を答えるのは、天皇である。執筆が天皇に対して「尋申」というのは、いささか敬意の程度が軽いようにも思われるが、執筆に問われて答えるのは、明らかに、天皇自らのこととされている。『建武年中行事』において、何の断りもなしに「仰せらる」などという敬語が用いられる対象は、天皇の行為に限られるからである。もし、天皇の行為を関白が代行して「仰せらる」というのであれば、関白を主語に置き、代行たることが明記されたい。『建武年中行事』の場合には、そういう形になるのが、通例である。

前項でも触れた通り、叙位議の次第が、儀式書や日記等に見られるようになるのは、十世紀以降のことであり、従って、それらは当然、摂関の存在を前提としている。これを承けて、『建武年中行事』の叙位議においても、関白は確実に存在している。当日の早朝、天皇に先んじて申文を内覧するのは、関白であろう。また、左陣に控

える大臣以下とは別に、殿上の間に伺候し、大臣の昇殿より先に御前の座に着くとされているのも、関白である。なのに、この場面に限っては、関白の存在が無視されている。

問題の核心は、どうやら、加階に関わる作法という点にありそうである。だが、この問題のみに的を絞って深追いするには、未だ確認できていないことが多すぎる。本文を読み進めるうちに、さらに周辺の事情が明らかになることもあるだろう。これについては、一通りの検討を経た上で、改めて考えてみることにしたい。

院宮の御申文めしにつかはさんと奏。勅許の後、近衛将をめしこれを仰す。御申文ども、持て参りぬれば、これをとりて奏聞す。十年勞奏する時の如し。主上これをととりて、おのく封をひらき、かけ紙を引とりて、上臈の御申文の中に残りを巻きぐして、返給。これよりさき、硯の笥の申文をくだし給。関白、座に候はゞ給て次第にひらき見て、執筆につたふ。かかいは、小折紙にしるして、ひそかにたまふなり。

* 「近衛将をめしてこれを仰す」 Ⅱ『群書類従』本「近衛将をめして奏聞す」

ここには、院宮御給の申文・硯の笥の申文・加階の折紙に関する作法が記されている。院宮の年爵の申文は、前以てということはなく、議定開始後に奏される。執筆が天皇の勅許を得て参議に命じ、参議は殿上間に控える近衛次将に命じて、これを持参させる。執筆が、封をしたままの申文を、十年勞帳奏覧の際と同様の作法で以て簾中に進めると、天皇は、一通ずつ開封して中をあらため、一括一巻きにして、執筆に下す。それぞれの札紙は、外したまま天皇の元に置いておく。天皇が申文を纏めるのに、上臈から出されたものが

外側になるように重ねて巻くというのは、これを一件ずつ議する時のための用意かと思われる。但し、院宮御給については、上臈の申文から順に議して行く。^③ 執筆は、まず申文を院宮の臈次に従って座の前に並べ置き、順に叙して行くのである。重ねて巻いた申文を、執筆が一枚ずつ取り上げる際には、上臈が最後になるはずだから、この重ね方は、叙位の順序を示そうとしてのものではない。おそらく、執筆は、遠方より手元へと、下臈から順に申文を並べるのである。その便宜を、天皇が予め考慮して、ということでもあるのだろうか。

その次に見える「硯の筥の申文」というのは、外記・史等の上官の叙爵や、弁・少納言等の加階を申請する文で、事前に蔵人方に提出され、当日早朝の選定を経たものである。天皇から執筆に下される際、関白が目を通すこととされている。本文には「関白、座に候はゞ」とあり、関白の存在に含みを持たせたと受け取れぬこともないが、さしあたり、この言い方に特別の意味を認めることは、しないでおく。^④

折紙というのは、加階についての天皇の意向を、「注文」として檀紙に記したものだ。外記方の勘文が参照されるものの、加階は、注文に従って行うというのが基本である。『江次第第』は、「旧、以叙位勘文、被叙之。近代、有臨時朝恩、是以為小折紙也。」として、かつては勘文によっていたものが、最近では折紙に従って叙位を行うように変化した、と述べている。これは、『西宮記』に「預叙位者〔依外記勘文及十年労働文、六位入二十年労働〕とあり、あるいは、『江次第第』に「執筆開勘文一通見之、可案取叙人数」とあるのを、文字通りに解したものである。

しかし、折紙のことが載らぬから、『西宮記』や『江次第第』の当時に、それがなかったとするのは、あまりに真つ当な解釈ではなからうか。『江次第第』から時期的にそれほど隔たっていないはずの『玉葉』の叙位議記事には、注文による加階の様が、詳細に記されている。『西宮記』『江次第第』等の儀式書にとって、注文による叙位は「秘事」に属する事柄であり、表舞台のシナリオに登場すべきものではなかった。折紙の存在はあっても、これを明記することは避けたという推測も、十分に成り立つのではないか。^⑤ 折紙の性格は、もともとそうしたものであるから、『建武年中行事』の本文も、天皇から執筆に「ひそかにたまふなり」とするのである。

ところで、本文に述べる院宮御給の申文・硯の筥の申文・加階の折紙に関する作法は、必ずしも、時間の経過に沿って配列されているわけではない。仮に、これらの作法の記述が、議定の流れを忠実に写し取るうとする意識を以てなされたものと解した場合、まず、硯の筥の申文が下され、次に院宮申文の奏覧があり、それとは別に、加階の折紙のことも行われる、ということになる。だが実際のところ、これらの作法の時機については、いずれも、叙爵の間という以外には、それほど厳密に特定し得るものではなかったのである。

例えば、院宮申文の奏覧は、『江次第第』に「早晚不定」とされる通り、その時機は一定していない。参議に持参の命が下ってから帰参までに相応の時間を要するため、奏覧の時機を確定し難いのである。極端な言い方をすれば、加階に入る以前、つまり、院宮申文によるもの以外の叙爵が行われている間に、奏聞がなされさえすれば、余程遅延しても、議定の進行に特別な支障をきたすことはなかったはずである。また、硯の筥の申文は、一般的には、議定の開始と

同時に、あるいは、式部・民部を議する間に、というように、比較的早い時機に下されたようであるが、これも、叙爵の終わり近く、上官の叙爵を議する以前に執筆の手に渡ることが必要なもので、その条件さえ満たせば、時間的に多少前後しても、特に問題とはされなかつたろう。同様に、加階の折紙も、叙爵の終了する以前、加階に先立って、執筆に下されれば、それでよいのである。

また、これらの作法に関する記述が、時間の経過に沿った形で、ここに置かれていたとした場合には、前後の場面との繋りも、却って不自然なものとなる。院宮申文・硯の箇の申文・加階の折紙に関する記事の、すぐ前の場面には、「式部・民部を叙す」の後に「此間けんばいあり」とあつた。叙位議は寒中の儀式であり、議定は夜中から明け方にまで及ぶため、議定の半ばで、火櫃・衝重を据え、勅盃を行い、つまりは休憩を挟むことがある。勅盃の時機に特に定めはないが、本文に言われるのが、式部・民部の叙爵の間ということであるとすれば、いかにも早急である。「此間」とは、相当に緩やかな時間の幅を以て、そのように言うのであろう。即ち、加階に入る以前、叙爵を議する間に勅盃を行う、というほどの意味に受け取るのが妥当なところである。一方、次の場面を先取りすれば、その冒頭は「蔵人、並に氏爵などおのおの叙しはてゝ」となっているが、実際には、式部・民部の叙爵が終了し、次に院宮申文の奏覧や折紙のことも全て終わり、その後に、蔵人の叙爵や氏の爵等が議されるというわけではない。院宮申文以下の作法は、蔵人・氏爵をも含めた叙爵の間に、行われる。従つて、「蔵人、並に氏爵など」というのもやはり、申文や折紙のこととは一応切り離し、式部・民部に続く叙爵の種目について挙げたもの、と解すべきであらう。

即ち、院宮御給の申文・硯の箇の申文・加階の折紙に関する作法の記される部分は、時間的な前後関係とは別の論理で、一とまりに、ここに置かれたものと考えられるのである。院宮御給の申文・硯の箇の申文・加階の折紙は、いずれも、年勞制に基づく叙位とは別種の、恩寵による叙位に関わるものである。そして、院宮申文の扱いや、蔵人の選定を経た申文、密かに下される注文は、叙位の可否に対する天皇の意志を、他ならぬ議定の現場において、最も直接的に表すものと言えるだろう。

叙位議とは、天皇の勅叙について議するものである。しかも、その本旨は、あくまでも天皇の勅叙というところにあるのであつて、公卿への諮問という要素は、二義的なものである。仮に、叙位議という儀式をそのように捉えた場合、院宮御給の申文・硯の箇の申文・加階の折紙に関する天皇作法に、特別な重みが与えられることになるのは、必然である。議定の意義はこれらの作法に集約される、と言つても過言ではないからである。

蔵人、並に氏爵などおのおの叙しはてゝ、折紙にまかせて、加階をおくよりはしざまに、次第にかきをはりて、年号月日を書て、はしにまきかへして、はこに入て奏聞す。これを御覧じて返給。大臣、殿上にいでゝ、清書の上卿にさづく。大中納言のあいだなり。

種目については「蔵人、並に氏爵など」と一括りにされて、叙爵が終わる。次には、加階を行う。執筆は、下位の者から上位の者へと、「折紙にまかせて」叙人の名を書き入れて行く。こうして、叙位簿が完成すると、執筆は、記入のために奥の方から外巻きにしてあつた紙を、改めて、奥から端に向けて内巻きに巻き直し、箇に入れて

奏覧に供する。ここに、議定が終了する。

以上、見て来たように、『建武年中行事』の議定の場面は、議定の主役たる天皇の作法を中心に構成されている。ここでは、叙位の種目や順序などは、さして重要なことではない。執筆作法も、それだけを取り出してみれば丁寧に書き込まれているかのようであるが、その実は、天皇作法と関連を持つ限りにおいて、しかも、御簾の内から見るような視点で、書かれているに過ぎない。議定における天皇の役割を示し、それによって、天皇の主導する議定というものを明らかにすること。『建武年中行事』における記述の眼目は、そこにあるのだと思われる。

天皇は、議定の開始を決定し、十年労働を閲し、式部・民部以下の叙爵にあたつては、その都度、加階の人数を指示する。加階の可否は、全て天皇の意志によるからである。院宮の申文を開封し、直属の藏人を選別させた申文を下し、注文の折紙によって加階を命ずる。議定における天皇の役割を、『建武年中行事』は、そのように記す。『建武年中行事』にとつての議定とは、そうした天皇作法を以て、一切が完結すべきものであったのである。

最後に、議定終了後の、入眼・請印の次第についても、目を通しておこう。この部分には、今まで見た来たものとは、やや種類の異なる問題が含まれていそうである。

上卿たまはりて、陣座につきて、参議に仰て、下名をかくしむ。また大内記に仰て、位記作らしむ。作て、筥に入て、まきおほせて、次第せしむ。其後、また請印せしむ。請印おはりて奏聞す。これを三度の奏といふ。式兵二筥にわかちて「公卿あらば三筥也。式一二と銘を押す」、からげて、うへに下名をさして奏

す。藏人、御厨子におく。七日節会に、おのゝあち給なり。

*「式一二と」Ⅱ『群書類従』本「或一二と」

儀式書・作法書・日記等の諸資料によれば、入眼・請印の次第は、およそ次のような手順から成っている。入眼の上卿を務める納言は、執筆から叙位簿を受け取り、議所あるいは陣座にて位記の作成にあたる。叙位簿に従つて清書をさせ（入眼）、次に内印を捺させ（請印）、次には、巻き整えて筥に入れた位記を、板で間仕切りし、あるいは小札を押して分類させる（次第）。その間に、あるいは位記作成の後に、七日の叙位式に使用する叙人名簿（下名）をも、別に作らせる。完成した位記は、さらに幾つかの筥に分け、それぞれに銘を押し、下名を添えて天皇に奉る。

位記作成の手続きは、以上のようなものであるが、この手続きは、入眼・請印・次第の各段階ごとに、藏人を通じて天皇の承認を得る、という形で進められる。天皇は、入眼終了の報告を受けると請印の命を下し、請印の報告を受けて次第を命じ、次第を了えて位記作成が完了したとの報告を受ける。上卿は、都合三度にわたり、奏聞を行うことになる。「三度の奏」は、叙位議を締め括るに相応しい作法である。最終段階に至るまで、繰り返して天皇の意志を仰ぐという厳密さに、叙位議とは、あくまでも天皇親授の叙位のためのものであるという、基本的な精神が読み取られるように思ふのである。

『建武年中行事』の本文も、位記・下名の作成とともに、「三度の奏」を、記述の中心に置いているようである。しかし、そこに言われている「三度の奏」とは、一体何を指すものであろう。位記を作つて奏し、次第をなして奏し、請印の後にまた奏す、とでも言うのであろうか。そもそも、位記とは、一旦完成させ、次第も了えてしまつ

てから、再び内印を捺すという、奇妙な手順を経なくてはならぬものなのだろうか。『建武年中行事』の「三度の奏」は、その称のみが生きていて、しかし無内容である。どこかで、意味が取り違えられたものであるとしか思われない。そのことは、当然、位記作成の手続きについての理解の仕方とも、密接に関わっているはずであるが、次第終了の後に「また請印せしむ」というのも、やはり、何らかの錯誤によるものであろう。

ここには、『建武年中行事』の記述が、どのような原資料を基になされたかという、書誌的な問題が含まれている。直接には、そういった種類の問題として、捉えるべきであろうと思う。だが、別の観点から眺めてみれば、「三度の奏」という称を、入眼・請印の次第の重要なポイントとして記し留める態度と、手続きそのものに対する無頓着という、両者の対照的なありかたは、議定の表現にも一脈通ずるところが感じられ、記述の特徴として興味深い。そこでは、天皇の存在を示し、その権威を表す作法が、何よりも大きな位置を占める。一方で、公卿の奉仕する事務的な手続きの実際は、ほとんど関心の外に置かれている、というように。

『建武年中行事』の叙位議の記事は、総体として、天皇にとつての儀式のありようを提示したもの、と考えてよいと思われる。個々の次第については、公卿作法のみで成り立つ部分もあるものの、全体の次第構成や、議定の記述については、間違いなく、天皇の視点を以てなされたものであると言える。

本文検討の作業を通じて、改めて認識させられたことは、同じ一つの儀式であっても、記述の視点がどこに置かれるかによって、全く別のものであるかのように、その姿を変えらるということである。

つまり、叙位議という儀式を、天皇を主体として捉えるか、公卿を主体として捉えるか、その視点の違いが、記述の上では儀式の様相の違いとなつて、如実に表れるのである。

物事を捉える角度がその表現を決定するということは、勿論、一般論として言えるのであり、そのこと自体を、事新しく強調しようというつもりはない。そうではなく、特に叙位議の記述について、この傾向が顕著に表れることに、注目するのである。また、天皇の視点と公卿の視点との相違と言うのは、この場合、家職に関わる作法を記し留めるというような、個々の記主の目的意識から生ずるそれとは、基本的に質の異なるものであろう。即ち、天皇と公卿の視点の相違は、叙位議という儀式を巡る、両者の構造的な緊張関係に由来するのではないかと思うのである。

叙位議とは、天皇の勅叙について、天皇が公卿の諮問にかけるというものである。だが、その本旨を、天皇の勅叙というところに認めるか、公卿への諮問というところに認めるか、となると、解釈は大きく二分されることになる。天皇にとつては、予め公卿に諮るということ自体が、私的範疇に属するものと認識されていたとしても、それほど不思議はない。しかし、公卿にしてみれば、勅授に関与する、諮問に与るという主体性が、叙位議に関わる際の、必須の要件であつたろう。また、朝儀とは、あくまでも公のものであるとした場合には、当然、天皇の私的な儀式などというものが存在する余地も、ないはずである。

『建武年中行事』の叙位議の記事のうちでも、特に議定の場面には、天皇主体の儀式解釈が、顕著に表れている。院宮申文・硯の宮の申文・加階の折紙についての記述を見ると、これらに關しては、

天皇が全てを掌握し、可否の決定は天皇一人の意志に懸かっていたかのようにさえ思われてくる。しかし、これが公卿の日記となれば、そのような書き方は、決してなされない。『中右記』に記される議定においては、しばしば、公卿が叙爵や加階について詮議を行っていた。たとえ、最終的な決定権は天皇にあるうとも、議定を支える公卿の活動を記録することは、即ち、叙位議における公卿の存在意義を確認することにもなるのである。また、公卿主体の視点に立つ儀式書の記述に、折紙のことが現れるはずはない。たとえ実際に行われていたとしても、それが天皇の私的な行為である限り、明言は憚られたに違いないからである。

但し、公卿とは言っても撰関の場合は、大臣以下とは、また事情を異にする。摂政の立場については言うまでもないが、関白は、叙位議に関して、大臣以下の側よりも、むしろ天皇と同じ側に立つのである。天皇は、儀式に参加せぬ院だけでなく、関白とも、事前に相当の打ち合わせをしていたものと思われる。『玉葉』によれば、関白は、議定に先立って折紙を清書し、昼御座で天皇に奏聞している。議定に入れば、執筆に加階の人数を示すのみならず、申文・折紙を下すのも、関白の役目である。加階その他について、全てを掌握していたのは、天皇だけではなかったのである。

従って、『玉葉』の議定の記事、特に関白九条兼実の時期に成る記事においては、天皇の影も、公卿の影も、同じ程度に薄い。天皇は、御簾を動かして合図をする他、ごく稀に、求められて勅定を下すこともあるが、自ら言葉を発するなどということは、ほとんどない。関白は、御簾の下にあって、簾中の天皇と執筆との間を取り継ぎ、生身を現さず、肉声を発しない天皇に成り代わって、事実上、議定

の進行を司るのである。

『建武年中行事』の記す叙位議にも、関白は登場する。しかし、議定の場に限って言えば、関白は、存在しないも同然の状態で置かれている。天皇と執筆の間には、基本的に、何物も介在していない。天皇は、御簾一枚を隔てて直接に執筆と接し、自ら声を挙げて命を下し、議定を主導する。院宮御給の申文・藏人方に出された申文・加階といった、恩寵に関わる叙位について、それらの可否を握るのは、天皇のみである。

先に、しばらく棚上げとしておいた問題がある。式部・民部の叙爵の場面を検討する際に、加階の人数を執筆に指示するのが、関白ではなく天皇とされていることについて、疑問を呈しながらも、直ちに答えを出すことは避けた、その問題である。『建武年中行事』の言うところに従えば、たとえ関白が座にあったとしても、叙爵の段階で、予め加階の可否を把握しているのは、天皇のみである、ということになる。実態とは一致していかなくとも、そうなるのである。それは、関白を抜きにして成り立つ議定を提示するための、作務的な措置だったのであろうか。天皇と大臣以下の公卿との間に介在する者の何もない、そして、加階の決定という特権的領域を、天皇と共有し得る者など誰一人として存在しない、そのような議定を表すための、意識的な処置だったのであろうか。

もしそうであるとすれば、『建武年中行事』の叙位議の記事は、後醍醐についての既定の評価、即ち、人事に関する独裁的傾向、撰関の存在を否定する親政志向という評価に対して、これを傍証する一資料とも言えるかもしれない。ただ、正直なところ、予断に引かれて強引な結論を下すことになるのではないかという恐れは、ここに

至っても、未だ消えていない。この問題については、やはり最後まで、断定的な言い方を差し控えておくこととしたい。

ここで確かめられたことは、次の一点のみに要約できる。『建武年中行事』の叙位議の記事は、天皇を中心とするものである。叙位議という儀式は、もともと、天皇の存在、その意志を軸として、組み立てられている。天皇の特権的領域があることも、前提となっている。だが、そのような儀式的性格が、公卿の著述によつて明かされることは、ほとんど望み得ない。これに対し、『建武年中行事』は、天皇の視点を以て、天皇のためにある叙位議というものを、示してみせたのである。

以上のような『建武年中行事』の記述が、後醍醐の創造になるものであるか否かについては、不明と言うより他はない。但し、前項に触れたような次第構成と叙述の前後との関係、その整合性の乏しさや、本項で扱った議定の場面の独特の組み立て方、さらに、入眼・請印の手順に関する個性的な解釈などを見ると、記事を成すにあたって全体の手本となるような纏まった著述等があったとは、とても思われない。各種の資料を用いた上で、独自の編集をなしたもののというだけでは、間違いのないところであろう。

また、後醍醐が、『建武年中行事』に記されたような叙位議を、実際に行ったかどうかについては、これも勿論、明らかにし難いことではある。しかし、議定はともかくとして、儀式全般を記述通りに実行することは、不可能であつたと思われる。先にも挙げたが、入眼・請印の手続きや「三度の奏」についての、あまりにも恣意的な理解の仕方を見れば、そのように推察せざるを得ないのである。

注

(1) 特に、『世俗浅深秘抄』『官文取事』の記述は、諸説を勘案して、極めて微細にわたっている。本書を後鳥羽院の撰とする和田英松説(『皇室御撰之研究』)が正しいものとすれば、その記事からは、天皇・院の、公卿作法に対する関心の所在を窺い得ることになり、『建武年中行事』における公卿作法の記述を考える上でも興味深い。なお、叙位・除目の際の「官文を執る」作法は、儀式作法に通じた公卿を称賛する逸話にも、格好の素材として、しばしば登場する。『古今著聞集』巻第三、公事、第一百・百二話。

(2) 『中右記』長承元年(一一三二)正月五日、同二年(一一三三)正月五日、保延二年(一一三六)正月六日、『玉葉』治承二年(一一七八)正月五日、同三年(一一七九)正月五日、同四年(一一八〇)正月五日、建久七年(一一九六)正月六日、他。

(3) 『玉葉』治承二年正月五日、『玉葉』承久三年(一二二二)正月五日

(4) 『江家次第』「自御前給申文・勘文等」の注に「有・関白・時給・関白」とするのは、天皇から執筆に下すというのが主旨で、関白の検閲は従であるとの意を込めたものであろう。『建武年中行事』の言い回しも、これに倣った可能性がある。

(5) 例えば、『西宮記』に、公卿の加階について「依例」と注するが、このようなケースは、注文によると考えてもおかしくない。また、『江家次第』「叙位議」の「摂政時叙位事」は、議定の次第の冒頭に、まず「叙位事等在別記、為秘事、仍不記」と記してから、「大略」として通常通りの細目を立てている。「別記」には、注文のことが記されていたのではなからうか。なお、『玉葉』の注文に関する記事については、注2に挙げた各条その他を参照。

(6) 儀式書としては、『西宮記』『北山抄』『江家次第』、作法書としては、『柱史抄』『夕拝備急至要抄』『内局柱礎抄』、日記では、『中右記』嘉承二年（一一〇七）正月五日、『吉記』元暦元年（一一八四）十一月一七日大嘗会叙位条等に詳しく、これらを参考にした。

(7) 例えば、『江家次第』『叙位入眼』には、完成した位記を天皇に奏し、入眼の座を撤し、上卿退出というように、位記作成の次第が一通り記された後、「此次請印、臨時位記者、同宮横置之、奏聞、請印了次第撰留」とある。これは、恒例の叙位の位記を作る際に、ついとして臨時の叙位の位記も作成しようという場合には、請印・奏聞の終了後、前者のみに次第を施し、後者が紛れ込むことのないようにするということを述べたものであるが、「此次」という書き方には、やや紛らわしいところもある。（同じ文は、『北山抄』『位記請印事』にも、次第末尾に注記の形で見える。）『建武年中行事』の本文が、どのような資料によるものかは不明だが、同様の記述が、誤った解釈を施されたまま、本文に取り込まれたということも考えられる。

(8) 『中右記』永長元年（一一〇九）正月五日、康和四年（一一〇二）正月五日、天永二年（一一一一）正月六日、長承二年正月五日

(9) 注2の『玉葉』各条を参照。

(10) 『江家次第』『摂政時叙位事』に、「若不・出御時、布袴御簾中」とある。摂政不在のまま、直廬の儀が行われることもあると言っているのである。ならば、天皇不在の御前の儀もあるのだろうか。そのような場合、摂政あるいは天皇の意向までも不在のまま、叙位が行われるとは考えられない。折紙や申文さえあれば、後は事務的な手続きを残すのみ、ということだったのだろうか。主催者の不在の場合では、却って公卿詮議の機会も封じられることとなり、こうしたケースが記されること自体、議定における公卿の参加が、時に形式的なものであったことを推測

させる。尤も、全て外記勘文に基づいて定められるのであれば、特段の問題はなからうが、その可能性は薄いと思う。

* 本文出典一覧

『建武年中行事』——『群書類従』
『江家次第』『西宮記』——以上、『神道大系』
『江次第鈔』——『続々群書類従』
『雲図抄』『貫首秘抄』——以上、『群書類従』

原則として旧漢字は新字体に改め、注記は「」内に一行書きとした。また、引用にあたって、『建武年中行事』については、和田英松註解・所功校訂『新訂建武年中行事註解』を参考に仮名遣い・文字遣い等を改め、『雲図抄』『貫首秘抄』『江次第鈔』については、私に句読点等を改めたり加えたりした。